

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第29回 伊藤公平

多彩な才能が開花

伊藤公平は、明治34(1901)年、印旛郡八生村押畑(現在の押畑)に父総平、母よねの長男として生まれた。

父が歌人であったこともあり、幼い頃から短歌や文学に触れる機会が多かった。成田中学校(現在の成田高校)を卒業すると、國學院大學に入学し、文学を学んだ。

しかし、漫画にも興味を持っていた公平は、絵画の学校に通い始め、いつの間にか学業そっちのけで絵の勉強に励むようになっていた。

大正12(1923)年、大学を卒業すると教員となり、安房農業学校(現在の安房拓心高校)や千葉高等女学校(現在の千葉女子高校)に赴任。教鞭を執る一方で、政治漫画家として活躍していた岡本一平に師事し、漫画を勉強した。元々、ユーモアのセンスがあった公平は、当時活躍していた多くの漫画家から才能を認められ、新聞に社会や政治を風刺した1コマ漫画が掲載されるようになった。それが原因で茂原の長生中学校(現在の長生高校)へと異動することとなったが、その後、千葉女子師範学校(現在の千葉大学教育学部)に転動すると、今度は短歌に打ち込むようになった。印旛郡本埜村(現在の印西市)出身の歌人



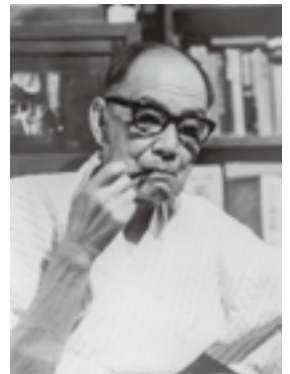
左/41年間描き続けた絵日記



右/公平をしのんで建てられた歌碑(場所:押畑)

明治34年～昭和59年(1901～1984)

印旛郡八生村押畑に生まれる。成田中学校から國學院大學に入学。教師や市・県職員として勤務する傍ら、多彩な才能を発揮し、漫画家、歌人、エッセイストとしても活躍した。成田市民憲章の制定や市内中学校の校歌の作詞なども行った。



である吉植庄亮^{よしうえしやうりやう}に師事し、吉植が主宰する短歌雑誌「橄欖」^{かんらん}の刊行を手伝った。さらに、千葉県連合青年団の機関紙の編集に携わるとともに、農村部で働く青年たちに短歌の指導を行った。

文化人として活躍

昭和16(1941)年、教員生活に終止符を打ち、千葉市兵事課長に就任。その後、県農業会情報課長を経て、県中央児童相談所長となった。その間、漫画や短歌だけでなくエッセイを書き始めるなど活動の幅を広げ、多くの本を出版した。また、東京日日新聞(現在の毎日新聞)千葉版の短歌投稿欄の選者となったほか、短歌教室を開催して歌人の育成にも努めた。

退職後は千葉市内のデパートや農協の嘱託職員として、社内報の編集やチラシに掲載する漫画の執筆を行った。さらに、多くの団体からその多彩な才能を求められ、成田市民憲章の制定委員会会長、千葉県歌人クラブ幹事、NHK千葉放送局や千葉テレビの放送審議委員などを兼任。市内はもとより県内の文化・芸術の発展に大きく貢献した。

公平はこれまでの功績から、昭和46年に県功労者表彰文化功労を受章した。同58年、体調を崩した後も短歌の選定や雑誌の編集を続けたが、翌年、83歳でその生涯を閉じた。

多彩な文化人として多くの人に親しまれた公平をしのんで、自宅の近くには歌碑が建てられている。

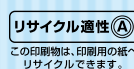
編集後記

日本中にラグビーロスを引き起こすほど話題になったラグビーワールドカップ。試合後の観客席では、違う国のファン同士でジャージーの交換が行われるなど、国を超えた交流に多くの人が感動を覚えました。今や日本のどこに行っても外国人観光客がいる時代。2ページで英語教育について紹介しましたが、子どもたちは小学生からALTと共に英語を学んでいます。未来を担う子どもたちがさまざまな国の人と交流し、社会で活躍する姿を見るのが楽しみです。

令和元年11月15日号 No.1399

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。